THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES
親鸞仏教センター通信
2023年9月1日発行
発行者　本多 弘之
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034　東京都文京区湯島 2-19-11
TEL. 03-3814-4900　FAX. 03-3814-4901
e-mail　shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ　http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp
Facebook　http://facebook.com/shinran.bc
Twitter　https://twitter.com/shinran_bc
2023.9
第86号

私にとっての「現場」

親鸞仏教センター主任研究員　加来 雄之

第４回「現代と親鸞」公開シンポジウム「宗教者にとって「現場」とは何か？」が開催された。三人の登壇者によって、宗教者とは、教えを通して現場を受けとめ、現場を通して教えを受けとめなおすという過程の中に我が身を置くものであることを、あらためて気づかされた。また、だからこそ教えの解釈の異なりが現場への向き合い方をめぐって「対立」が生むという現実も教えられた。

「現場をもっているか」という問いかけには、何か違和感を覚える。パスカル『パンセ』に「「ここは僕のだ。僕が日に当たる場所だ」。これこそ、この全ての地上での横領の始まりであり、縮図である」（L.64）とある。「現場をもつ」という表現には、その場所を自分の信念や他者への実践を検証する場所として私有することを肯定する危うさを感じる。

仏教を学ぶ者にとっては行住坐臥、いつでも・どこでも、どれほどささやかな、あるいはどろどろした日常生活の一瞬一瞬も現場でなくてはならないのではないか。また、どうすることもできないような限界状況にある人にとっても成り立つ現場ということに心を至さなくてはならないのではないか。このような問いを通して、宗教者にとっての「現場」の本質が見えてくるかもしれない。

シンポジウムの開催前、企画者の一人から「親鸞を学ぶあなたにとって現場はどこですか」と問われた。私は「僕にとっての現場は自己です」と即答した。しかし少し考えて、「私にとっての現場は、自明としていた自我の立場が揺り動かされ、自己が問い直され、真実のあり方に引き戻される場処や状況です」と補足した。

私は、それぞれの現場に「宗教者にとっての」という意味を与える「場」がなければならないと思う。人間の自我と世界を悲しむ如来の眼差しという「場」の中に自身を見出すときにはじめて、その現場は「宗教者にとっての」現場となる。自己をも他己をも包む如来というはたらきの「場」の中にある我が身に気づくとき、まったく異なった経験と考えをもつ自他が共にあることができる現場が浮かび上がる。

おそらく、宗教者にとっての「現場」とは、もつものではなく、自我を根底から否定し、しかも自身をどこまでも包む「場」の中で立ち「現」れることである。

親鸞の「ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏をとなうべし」（『正像末和讃』『真宗聖典』505頁）という仰せには、そのような現場を生み出す力を感じる。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」㊽

『一念多念文意』の拝読を始めるに当たって

親鸞仏教センター所長　本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」では、2023年1月から親鸞『一念多念文意』の講座が開始した。今回掲載する文章は、『一念多念文意』を拝読していくにあたっての課題と目的について、当センター所長・本多弘之が記したものである。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　越部 良一）

2001年に親鸞仏教センターが設立されて以来、この学事施設が目指すべき方向としてきたのは「親鸞思想を現代に開く」という課題である。その一つのあり方として、首都東京の中心で親鸞の選んだ聖教を解読してみようと試みてきた。そこで、初めに取り上げたのが、『無量寿経優婆提舎願生偈』（『浄土論』）であった。その拝読を、東京国際フォーラムにおいて毎月一度、年に10回を基本に５年にわたって計50回開催することができた。

それが一応終わったので、続いて『大無量寿経』を取り上げ、14年間（137回）にわたって、これを拝読した。これも読了したため、この度親鸞が書いた『一念多念文意』（以下『文意』）という仮名の聖教を取り上げることにした。というのも、この仮名の聖教には、当面の題名のイメージとは異なり、親鸞思想の中心にある問題意識や現代に通じる課題を読み取ることもできるのではないかと拝察したからである。

題名からは、一念義か多念義かという称名念仏についての論争が主題となっているように了解される。たしかにそれが当時（鎌倉時代）の法然上人をとりまく弟子の関心であったし、法然上人没後に残された弟子たちの論争の中心にもなっていた。この『文意』のもとになった隆寛の『一念多念分別事』（以下『分別事』）が課題にした問題意識でもあった。称名念仏を引き受けた上で、その名号を１回でも称えれば必ず往生できるとするか、やはり凡夫なのだから何回でも称える必要があるとするのか、という称名の回数を問題意識の中心とする議論である。

それに対して、『分別事』での隆寛は、称名の回数について経典に「一念」ということも「多念」ということも示されているのだから、そのいずれかという議論はナンセンスである、と教え諭す。しかしそれでは、いずれが正しいのかという議論が起こっているのに、なぜ聖教には両方が説かれているのか、ということに対して、明確な確信を持って「一念・多念」と説かれる意味を考察していないようにも見える。

その点について親鸞は、隆寛の立場を受けて、一念か多念かのいずれかに固執するのはナンセンスであるということを発信しつつ、称名の根底にあって如来が本願力を「名号」を通して表出し、名を通して願心を衆生に受け止めさせようとしているということ、すなわち名によって「本願力」を表現する意味、つまり無上功徳（大涅槃）を一切衆生に平等に付与するという、大乗仏道の願心の意味を丁寧に教え勧めているのである。

しかも、本願力を受け止めるあり方については、単に『分別事』で取り上げられている経文・典籍を解釈するにとどまらず、それぞれの引文の意図を明らかにするために、さらに多くの経文や釈論などを加えて、天親や曇鸞、さらには善導などの受け止めを、説き表していかれるのである。

このことによって、混沌として不安に満たされている時代社会に対して、無限なる大悲の光明を仰ぐ視野を開くことの可能性を示すこともできるのではないかと拝察するのである。

親鸞と中世被差別民に関する研究会

中世の狩猟文化と「野生の価値」

上智大学文学部教授　**中澤　克昭　氏**

親鸞と中世被差別民に関する研究会では、2023年２月28日に、中澤克昭氏をお招きした研究会を行った。講題は「中世の狩猟文化と「野生の価値」」であった。本研究会は、中澤氏が、肉食や殺生による身分の再生産の実態にも迫った『肉食の社会史』（山川出版社、2018年）に次いで、近年上梓された『狩猟と権力――日本中世における野生の価値』（名古屋大学出版会、2022年）の問題提起を受けたものである。多様な史料を開いて、殺生などから中世の「心性」に迫った講義の一部をここに報告する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　中村 玲太）

柳田國男『後狩詞記』「序」に、狩りの楽しみということが力説されています。殺生の快楽は酒や色事の比ではないと。あれほど一世を風靡（び）した仏道の教えも狩人に狩りをやめさせることはできなかったのだと言います。日本中世史の研究で、こうした殺生の快楽の問題と真正面から向き合った研究というのは、横井清『的と胞衣』以外にはほとんどないのではないかと思います。横井氏は、不殺生戒が中世の人々に命のはかなさを教えたということを前提とされつつも、謡曲『鵜飼』を読み解き、漁の根源に位置づく、鵜飼の営みにおいての殺生の愉悦（ゆえつ）を指摘しました。鳥を捕るのも獣を狩るのも、それぞれに携わる人々にとっては、第一にその営みが心に愉悦をもたらすものなのだと。それを直視したい、そうでなければ親鸞の悪人正機説にしてもわからないと言うのです。堅持すべきだと教えられている一種の倫理観によって、殺生の愉悦みたいなものから目をそらしがちになってしまうのではないか。そうだとすると、殺生によって利を得ていた膨大な数の人の心性、メンタリティーについて、そのほんの一部しか見えていないということになるのではないかという、重要な問題提起だったと思います。

文献を探してみると、たしかに殺生である狩猟を楽しい、快楽だという言説が出てくるわけです。考えてみれば、人と動物の関係は様々で、それに伴う心意、メンタリティーを言説化する言葉も一様ではないはずです。ところが、我々も目にする往生伝などの物語でも、殺生は罪業で、それを実践する人々は悪人であるという表現が繰り返されている。もっと様々なメンタリティーがあるのだろうけれども、殺生を悪業であるとする説話がいくつもあり、それらは差別の構造をより強固にする役割を果たしたものではないか。『肉食の社会史』でも、そのことを指摘しておきました。

快楽・愉悦も含め、中世の人々が狩猟などの《野生のキャプチャー》に感じていた魅力を、「野生の価値」という言い方で括ってみたいと考えています。肉食のタブーは家畜から強まっていました。家畜と野生動物に、かなり明瞭な差があるということです。鷹で捕獲した鳥は食材・贈答品として非常に価値が高い。鷹狩は、殺生として禁じられ、罪悪であると言われましたけれども、同時に、それを楽しい、見たいと思う心が併存しています。《野生のキャプチャー》として魅力的な鷹狩を禁ずることには、貴族の自己卓越化の戦略みたいなものがあったのではないかと考えられますが、いずれにしましても野生を望ましいとする傾向が顕著です。

こうしたことを視野に入れて史料を見直していけば、中世の人々の行動様式や、中世の文化を規定した「野生の価値」が見えてくるのではないでしょうか。生業などの人々の営みについても、野生、自然にどの程度介入するのかという問題として考えてみましょう。人為的な操作改変の程度が大きい、つまり大きく自然を改変するような生業と、自然改変の程度が軽微で、野生を留保するような生業。そうした違いが、例えばその生業の社会的な位置や差別に関係していると考えてみることも可能ではないでしょうか。

現代と親鸞の研究会

第69回

安田理深と現代
―その思想の独自性をめぐって―

ポール B. ワット 氏（元早稲田大学教授・元デポー大学教授）

2023年３月２日、元早稲田大学教授・ポール B. ワット氏を迎えて、「安田理深と現代―その思想の独自性をめぐって―」というテーマのもと第69回「現代と親鸞の研究会」を開催した。安田理深（1900-1982）の思想は、近現代の真宗大谷派の教学に大きな影響を与えている。ワット氏の著作 *Demythologizing Pure Land Buddhism: Yasuda Rijin and The Shin Buddhist Tradition*. Honolulu : University of Hawai'i Press, 2016. は、その安田の思想を英語圏に公開する画期となる著述である。ワット氏は、講義において自身の研究背景と安田の思想の独自性について報告された後、多くの時間をディスカッションに当てることを提案された。以下、研究会の概要を報告する。

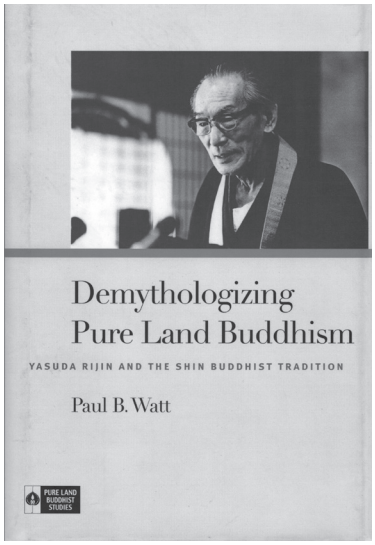
（親鸞仏教センター主任研究員　加来 雄之）

ワット氏は「仏教の魅力」として、自身が安田の思想を英語圏に紹介するにいたるまでの背景を語った。氏は、オハイオ州で生まれ、12歳のときに正式に長老派教会（Presbyterian Church）のメンバーになったが、高校時代から教会の教えを疑うようになった。また当時、アメリカの社会ではベトナム戦争や黒人差別などさまざまな問題が表面化していた。ワット氏は、新しい世界観の要求から、鈴木大拙の思想などに興味をもち、より健全でまとまりがある社会の可能性を求めて、1966年に日本に３年間留学（国際基督教大学）した。氏は、日本社会の形成過程に影響を与えた思想の一つとして仏教に関心をもち、帰国後、コロンビア大学（文理大学院）に進み、博士課程では慈雲尊者（1718-1804）を研究対象とした。2000年、当時デポー大学の教授であった氏は、京都・大谷大学真宗総合研究所の中の真宗大谷派の近代教学者を英語圏に紹介するグループに参加する。そして慈雲と同じく仏教思想の主流をあきらかにする課題に生きた現代人として安田に関心をもち、その英訳を担当することになった。

次にワット氏は「安田理深の思想の独自性」として、（１）安田は、若い時から真宗の「歴史家」

ではなく、真宗の哲学者になることが目標であったこと、（２）安田が絶えず繰り返していたのは、如来は衆生の本来性であって、衆生の他者ではないこと、（３）この立場を表現するために近年のアメリカ・ヨーロッパの哲学者・神学者たちの言葉、あるいは思想を借用した」こと、（４）安田の文章は、曽我量深や金子大榮のそれよりも読み手に現代的な印象を与えること、（５）親鸞の教えに見える末法思想についてはワット氏が翻訳した安田のエッセーや講義にはほとんど出てこないことの５点をあげ、そのうえで安田の思想に見出せる西洋思想の影響とその独自性を氏の翻訳した文章にもとづいて明らかにした。

約１時間の講義の後、ワット氏の提案によって残りの時間は「安田理深と現代についてのディスカッション」に当てることになった。氏からは「安田理深の思想を翻訳するにあたって感じられた問題？」、「『如来は衆生の本来性であって、衆生の他者ではない』と理解した人の毎日の生活はどう変わるか？」、「安田理深の思想がもつ世界的射程は？」という三つの問題が提出された。とくに第２点については、本多弘之所長をはじめとする研究員たちとの間で白熱した討議がなされた。あわせて安田の名号論など、真宗仏教を現代に表現していくための視点について意見交換がなされた。



本講義とディスカッションの詳細は、当センター研究誌『現代と親鸞』第49号に掲載予定である。

現代と親鸞の研究会

第70回

核をめぐる罪と悪

西村　明 氏（東京大学大学院准教授）
宮本 ゆき 氏（デュポール大学教授）

2023年３月８日、東京大学大学院准教授の西村明氏、デュポール大学教授の宮本ゆき氏をお迎えし、「現代と親鸞の研究会」を開催した。講題は、「核をめぐる罪と悪」である。以下、研究会の開催趣旨と講義概要、私たちが取り組まなければならない今後の課題を記す。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　宮部 峻）

■核をめぐる倫理と宗教

戦後日本ではタブー視されていたと言ってもよい核保有の是非が、昨今のロシアによるウクライナへの軍事侵攻を機に声高に議論されるようになっている。議論の多くは防衛費をめぐる財政的観点での対立、あるいは核武装をめぐる政治思想の対立に還元されている。

日本では、広島・長崎での原爆投下の歴史を踏まえて核をめぐる倫理が議論されてきた。宗教者も平和運動の文脈のもとで議論してきた歴史を持つ。しかし以前に比べると、昨今の核をめぐる問題に対して、倫理的な観点からアプローチする者は少ないのではないだろうか。だとするなら、なぜ、倫理的アプローチが退潮しているのだろうか。

今回の研究会では、核をめぐる問題で重要な学術的業績を発表し続けている西村明氏と宮本ゆき氏をお招きし、「核をめぐる罪と悪」をテーマにご講義いただいた。西村氏は、『戦後日本と戦争死者慰霊』（有志舎、2006年）をはじめ、宗教学の観点から戦争死者慰霊の問題について論じてこられた。宮本氏は、*Beyond the Mushroom Cloud*. New York : Fordham University Press, 2011にて、倫理学の観点から被爆者倫理について、とくにカトリックと浄土真宗に焦点を絞って議論している。

以下、それぞれの講義概要を紹介する。

■永井隆と「浦上燔祭説」（西村氏）

原爆投下を神の摂理によるもの、原爆で亡くなった人々を神の祭壇に供えられた犠牲、また浦上の被災を天主の栄光を世に示すための試練とする永井隆（1908～1951）の言説は、原爆を投下したアメリカ政府、戦争の惨劇を止めることができなかった日本政府の責任を免罪する性格を持っていると批判された。こうした問題をはらむ永井の言説を、高橋眞司は「浦上燔祭説」と名付けた。

永井の来歴を辿ってみると、従軍経験、放射線医としての被曝の経験が永井独自の死者像の形成

西村 明 氏

につながっていることがわかる。宗教的な語彙で彩られているかのように見える永井の浦上燔祭説には、放射線医としての科学主義的な理解の影響も見て取れる。科学主義と罪責性の自覚との関係は、現在の原子力をめぐる倫理的問題にもつながる論点である。

■日米での核兵器理解の違いと親鸞における悪（宮本氏）

核兵器が悪であるという理解は、アメリカでは広く共有されているわけではない。核兵器は悪と認めつつ、広島・長崎での原爆投下は仕方がなかったとする言説も見受けられる。悪のニュアンスが日米で異なるという問題もある。

核認識の違い、悪の理解の違いを考えるために親鸞思想を手がかりとすることができる。西洋的枠組みでは、人間には主体性があるということが前提とされる。それに対して、親鸞の悪の解釈には、倫理や道徳の範疇を超える側面がある。親鸞の悪の解釈は、主体性と責任という枠組みから作られた社会とヒエラルキーに挑戦する思想と捉えることができる。

宮本 ゆき 氏

■自覚の問題と現代の悪を考えるために

以上は本講義の簡単な概要であるが、研究会で本多弘之所長が述べていたように、今回の研究会で議論した核をめぐる罪と悪の問題は、親鸞における自覚の問題と現代の人類が直面している問題をどのように結びつけるのか、という課題にもつながる。現代の難題と親鸞思想の接点が示された本研究会の詳細については、『現代と親鸞』第49号に掲載予定である。

◇◆第４回◇◆
「現代と親鸞」公開シンポジウム

宗教者にとって「現場」とは何か？

開催趣旨

親鸞仏教センター嘱託研究員　伊藤 真・中村 玲太

宗教が活きる場所、活動すべき場所とはどのようなところだろうか。世界を見渡せば、相次ぐ災害や戦争、感染症の蔓延、社会的格差の拡大など、さまざまな状況が多くの人々を苦境に陥れている。より卑近なところでは、長引くコロナの流行下、法会やミサなどで人々が時間・空間を共にし、教えに触れる機会が失われてきた。こうした状況は一方で、さまざまな立場で宗教に関わる人々にとって、孤独の中で聖典やその教えと改めて向き合い、考えることを迫ってきた面もあろう。

2023年３月16日に開催された第４回「現代と親鸞」公開シンポジウムでは、こうした状況下において、宗教者にとって「現場」とは何なのか、その多義性やあいまいさも含めて考えてみた。日々、死や苦しみ、人生の諸問題と直面せずにいられない宗教者にとって、そしてより広くは宗教にさまざまな形で関わるすべての人にとって、宗教がはたらき、活きる「現場」とは何か……３名の登壇者による提題と、全体討論と質疑を通じて、多角的に展開された議論の要点を紹介する。

◆ 問題提起と全体討論・質疑

Ⅰ　苦の臨床という「現場」

吉水　岳彦（大正大学仏教学部非常勤講師、浄土宗僧侶）

日本の出家僧侶にとって何が「現場」だろうか。「僧侶」を職業として考えれば、寺院を運営し、法要や葬送儀礼を執行し、法話をする場面などが「現場」なのかもしれない。しかし「出家僧侶」の生き方を選んだ者にとっての「現場」は、そうした場面に限られない。それらも大切ではあるが、今日、お布施の多寡（たか）を気にしたり、葬儀や法事以外では経典を読むこともない僧侶がいるのも事実である。仏陀ご自身が「人生は苦である」との認識の上でさとりへの道を歩まれ、数多くの絶望した者の受け皿となったように、生・老・病・死にまつわる一切の苦や煩悩に振りまわされている自己や他者と向き合うあらゆる場こそが、すなわち「苦の臨床」の場こそが僧侶にとっての「現場」といえよう。

こうした観点から、発表では３つの現場の重要性を指摘した。第一に、生活困窮者の支援や被災地などでのグリーフケアといった活動。他者の苦悩に向き合うことで無力な自己を教えられる、大切な場である。次に、念仏会や法要などの現場。苦しみを抱える自己や他者の苦を仏さまに無条件に受け止めていただき、仏・法・僧と出会い、向き合う場だ。最後に、教化・伝道・執筆など、仏法を探究・発信・共有していく現場がある。苦の臨床に立つことで、自己のあり方を問われ、葛藤し、苦悩するうちに学びとった知見を人々と分かち合い、自身が心から求めるさとりや救いの道を「共に歩もう」と声をかけていく場である。苦に満ちた世界を生きるすべての人々と、支え合い、済（すく）い合おうと励むさまざまな「現場」を通し、僧侶はいかにあるべきかを問いかけた。

Ⅱ 現場ではたらき、現場にはたらく —仏教の言葉を学ぶということ—

田村　晃徳（親鸞仏教センター嘱託研究員、浄土真宗大谷派僧侶）

「現場」という言葉には、「人が体を動かし、仕事を支えている場所」というニュアンスがある。私は住職であり、法事を執り行っているとき、そこは住職の現場と言える。だが、読書はどうか。また私は保育園の園長でもあり、保育の現場と言えば、クラスで子どもたちと生活している保育士のことを思う。しかし、読書をするのは住職にとって欠かせない時間であるし、職員室での書類作業も保育園を支えている。

僧侶である私にとって、さまざまな現場は、現代の諸問題に直（じか）に触れられるという点で大切だ。保育園では少子化や家族のあり方の急激な変化、虐待といった問題に直面し、寺では檀家さん・ご門徒から地域の人口減少や後継者不足といった悩みを聞く。私にとってはいずれも人間を学ぶ場だ。そしてそうした現場を通じて人間を学ぶ方法が仏教ということになる。その学びには経典の読解も含まれ、教えの言葉を知ることで、同じ現場でも自分の見方が以前とは変わってくる。それは「現場の再構成」とも言えよう。一方、現場での経験がテキストの読みを深めていくこともあり、現場と聖典は相互に循環する。

明治期の仏教者・清沢満之が述べたように、自分の生まれる境遇を選べない「落在」した者であるわれわれは、人としてどのように生きていくのか。清沢は苦悶の中で現実を見つめ、浄土真宗の教えに出逢い、信念を得た。そんな先人の人生に、私はいつも学んでいる。現場は環境と人間の相互作用でできている。人生は思い通りになるはずがないが、仏教の言葉がはたらく現場において、自分が背負っているものに一生懸命取り組むことで、人間は徐々に育っていくのだろう。

Ⅲ キリスト教から考える「現場」の歴史と未来

小原　克博（同志社大学神学部教授、プロテスタント牧師）

ユヴァル・ノア・ハラリは『サピエンス全史』の中で、人類には「虚構」を語る能力があるとし、そこから神々や神話などが現れたと指摘した。宗教の世界には、直接的には認知したり語ったりできないものをシンボリズムで再構築する力がある。キリスト教に即して言えば、「隣人愛」の実践を説く「善いサマリア人」のたとえ話が好例だが、新約聖書におけるイエスのメタファーは日常を異化し、現場の批判的な再構築を求める。聖書に限らず宗教のテキストは、われわれが陥りがちな認知バイアスを超えていく根源的な力を持っている。

発表では、キリスト教における聖書解釈（テキスト）と現場（コンテキスト）の関係を考える手がかりとして、20世紀後半以降、いわゆる解放の諸神学という新しい流れが生まれてきたことに着目した。ラテンアメリカ解放の神学、アメリカの黒人神学やフェミニスト神学、また日本で聖書と部落差別の現実とを重ね合わせた栗林輝夫氏の例などでは、貧困や抑圧に苦しめられていた人々が、その貧困や抑圧の現場で聖書を読み、個々人の心の中の罪だけではなく、社会の構造自体の中に罪の状態を見いだした。テキストを「現場」のコンテキストの中で読むことで、「現場」の新たな解釈を生み、共同体に新たな力を注ぎ込んだのだ。一方、「文脈化の神学」は、テキストがコンテキストから超越する力を持ち、現場を外部から批判的に見る視点を与えてくれることを示した。

最後に、SNSなどの情報空間で長時間過ごす若い世代にとっては、その空間こそが「現場」に他ならないことを指摘した。「現場」のバーチャル化が進展する中で、宗教はどのように対応できるのか、未来の「現場」も考えていきたい。

全体討論と質疑

全体討論でも多様な議論が展開されたが、常に変化する各種現場の中で、恣意的な解釈がなされる可能性や、両極に割れる解釈がもたらす分断・対立をどうとらえるかなどが問われた。それに対し登壇者からは、現場で向き合う相手から学ぶことも多いということや、宗教者として教えを語る際に、「御同朋、御同行」という意識をもって大切な言葉を聴き手と共有することを心がけていることなどが語られた。また、幅広い「解釈の共同体」の中に自分の解釈を位置づけていくことが重要だとの指摘もあった。さらに、現場の解釈が対立したとき、宗教者は仲介者として和解に導く役割を担い得るのではないかとの展望も示された。

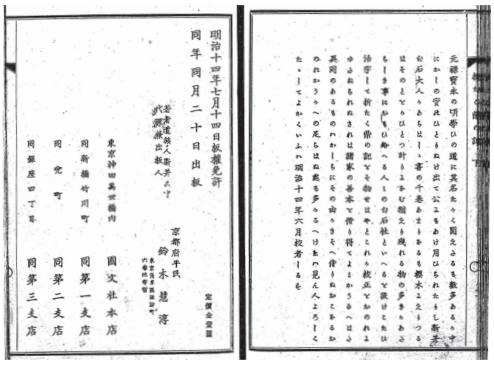
リレーコラム

「近現代の真宗をめぐる人々」第20回
（鈴木慧淳［?～1886］）

明治前期を生きた真宗僧侶の中には、宗門内外でユニークな活動を展開した人物が少なくない。京都府松屋町（上京区）圓重寺の鈴木慧淳もそのひとりである。明治14年（1881）渥美契縁とともに教導職廃止を政府に建言したことで知られ、翌年には東本願寺の執事となる。しかし、長円立に本山事務改革を主張したものとして取り調べを受け、職務を解かれている。一方で明治13年（1880）に生命保険会社の先駆である共済五百名社を安田善次郎らと共に設立した他、小野梓らによって設立された政治的啓蒙言論結社・共存同衆をはじめ多くの結社に関わった。

近年盛り上がりを見せている近代仏教のメディア史研究の観点から注目されるのは、彼が発起人および社員総代を務めた白石社の事業である。同社は、明治14年に浅草東本願寺の付近で新井白石の墓が発見されたことをきっかけとして、墓の保全と子孫の生活援助を図るべく結成された。慧淳の名を出版人として記した『折たく柴の記』『采覧異言』を皮切りとして、白石社は散逸しつつあった白石の著作を世に送り出していった。

埼玉県比企郡番匠村（現ときがわ町）の医師・小室元長は、白石社の新聞記事を読んで白石の墓と子孫の現状を知り、慧淳へ手紙を送った。その中で白石社の結成を、年来の本願を実現してくれた「望外之大幸」であると記している。白石社の出版活動は明治20年代で終焉を迎える。しかし、蓄積された書籍と人脈は国書刊行会へと引き継がれ、30年代後半に『新井白石全集』として結実することとなる。同全集は現在でも人文学研究の場で使われている。白石社の活動は、白石の著作が後の時代へと引き継がれる大きな契機となったのである。慧淳のような真宗僧侶が関わった予約出版は、書籍と結社、そして人と人とをつなぐ大きな役割を果たしたのではないだろうか。　（古畑 侑亮）


明治十四年七月十四日板權免許
同年同月二十日出板
著者 新井氏
出版人 京都府平民 鈴木慧淳
東京神田美土代町 國文社本店
同新橋竹川町 同第一支店
同横浜 同第二支店
同銀座四丁目 同第三支店

新井白石著・竹中邦香校『折たく柴の記』下（白石社、1881年）
請求記号142-134　国立国会図書館提供

お知らせ

■講座のご案内

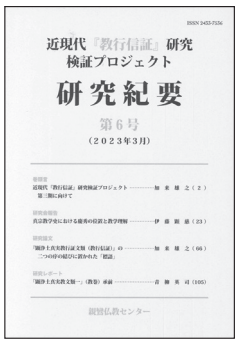
親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座 2023

2024年１月９日から２月27日まで毎週火曜日夜に開催予定。

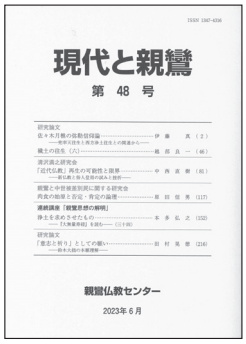
詳細は、ホームページ･SNSでもお知らせします。お楽しみに！

■出版情報

- 機関紙『親鸞仏教センター通信』第84号・第85号（2023年３月・６月発刊）
- 研究誌『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要』第６号（2023年３月発刊）



- 研究誌『現代と親鸞』第48号（2023年６月発刊）



- カール・ヤスパース著、越部良一訳『理性と実存 五つの講義』（リベルタス出版、2023年３月刊行）

■研究発表

- 中村玲太「證空思想とその評価の問題」（「科学と仏教思想」2022年度第５回研究会2023年２月24日）
- 中村玲太「天台本覚思想、法然、悪人正機の視点から」（菅原潤先生『梅原猛と仏教の思想』合評会、於歴史論研究会、３月21日）
- 繁田真爾「　」（井川裕覚『近代日本の仏教と福祉―公共性と社会倫理の視点から』書評会、於第29回「仏教と近代」研究会、2023年４月22日）
- 飯島孝良「歴代祖師の肖像に付された一休のことばを読む―その伝燈意識について―」（一休フォーラム、2023年５月８日）